

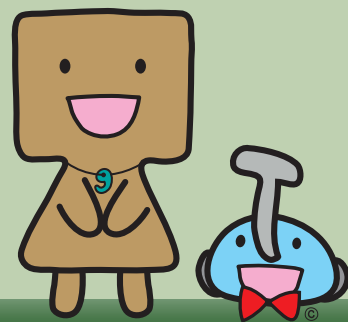
スルガ最初の王ここに眠る

たか お さん こ ぶん
高尾山古墳

沼津駅の北方約 2.5 km、愛鷹山の山裾に小高い丘があり、その上に地元の人々の崇敬を集める高尾山穂見神社が建っていました。

平成 20 年から行われた発掘調査によって、この高まりが古墳時代初期の東日本における最古級かつ最大級の前方後方墳であることが明らかになりました。

沼津市教育委員会
沼津市文化財センター



タカオさん

ジツキー2号

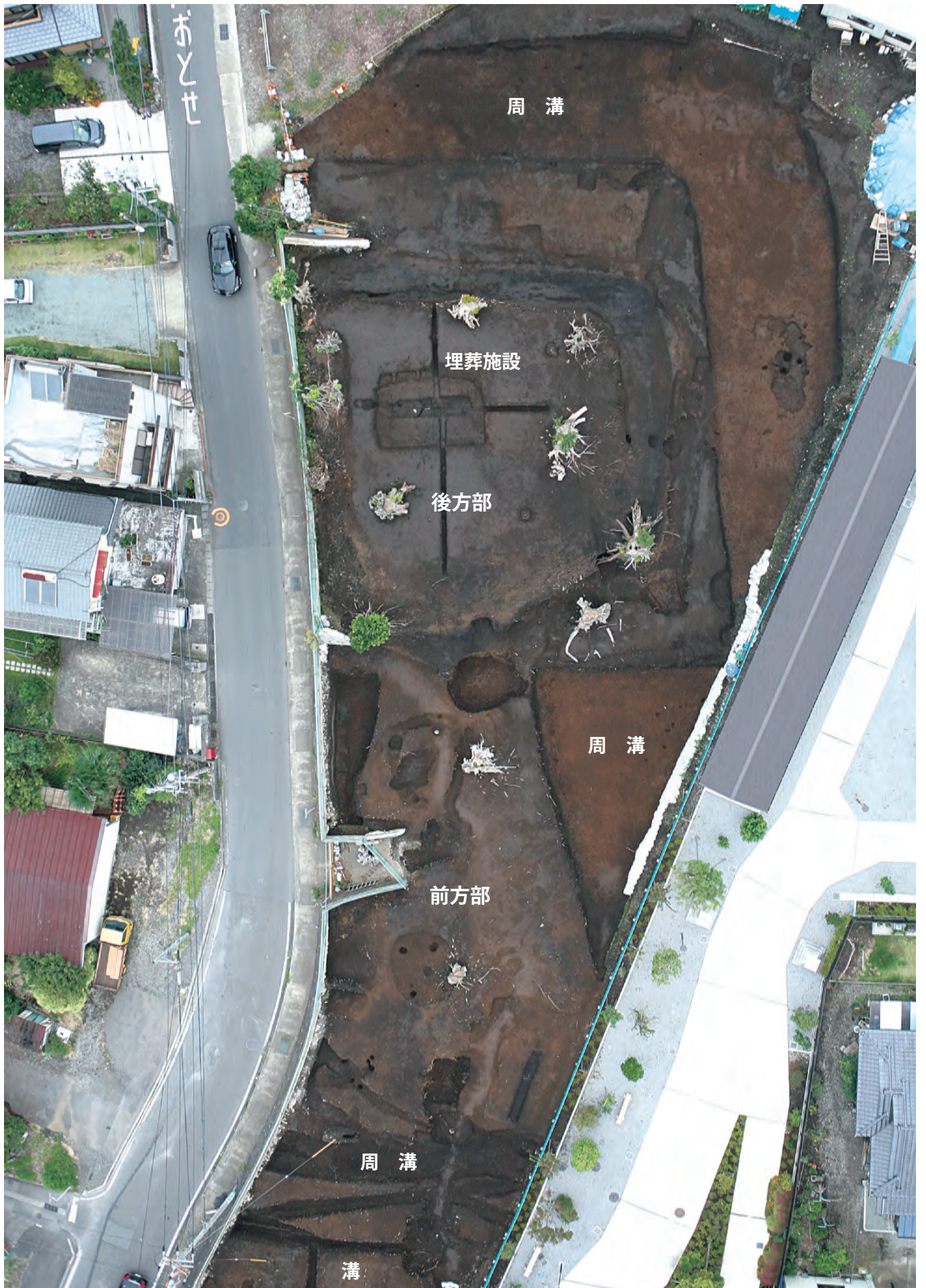
目次

- I 高尾山古墳はどんなところに造られているのか？
- II 高尾山古墳の形が示すもの
- III 高尾山古墳はどのように造られたのか？
- IV スルガの王が眠るために
- V 東国の古墳時代とスルガの始まり ①高尾山古墳の年代と埋葬
②高尾山古墳の歴史的評価

本書は、平成 24 年 3 月 30 日に刊行された沼津市教育委員会文化財調査報告書第 104 集『高尾山古墳発掘調査報告書』および、平成 24 年 7 月 22 日に発行された『高尾山古墳ガイドブック スルガの王 大いに塚を造る』の内容に基づき、平成 26 年度に実施された追加調査の結果を加えて作成した。



高尾山古墳の位置



高尾山古墳全景（上が北）

I 高尾山古墳はどんなところに造られているのか？



高尾山古墳は、愛鷹山麓の尾根と平地の境に築造され、背後に雄大な富士山、眼下には奥駿河湾を望む美しい眺望に恵まれています。

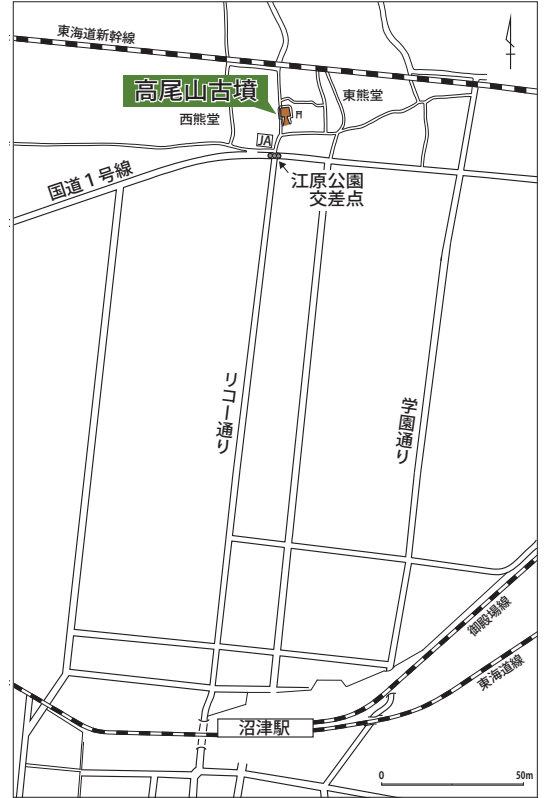
「これがスルガの王の塚か?!なんて大きいんだ!」

スルガの王に招かれた隣国の使者は、初めて見る巨大な塚にびっくりしたことでしょう。富士山と愛鷹山を背後にそびえるその姿は、スルガの王の力を強く印象付けたはずです。

古墳が築かれた当時、古墳西側の低湿地帯には田子の浦を湾口とする浮島沼が形成されており、海から沼へ進入すれば、古墳の南西2~3km地点までは舟で到達できたと考えられます。

スルガの王が生きた弥生時代後期には、舟の製作技術が発達し遠隔地との交流が活発化していました。波の穏やかな浮島沼は船の発着する港として利用され、物資の運搬や情報の伝達が盛んに行われていたかもしれません。高尾山古墳の雄大な姿は、海からやってきた人々の目にもいちばんに飛び込んできたことでしょう。

かつて高尾山古墳の後方部上には高尾山穂見神社^{たかおさんほみじんじや}が、前方部には熊野神社が鎮座していました。地元には古くからこの高まりが古墳ではないかと考える人もいましたが、発掘調査によりその姿が明らかとなりました。



高尾山古墳位置図

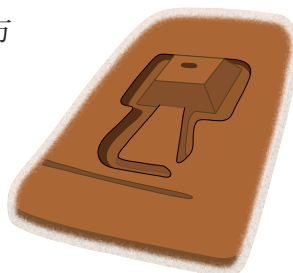
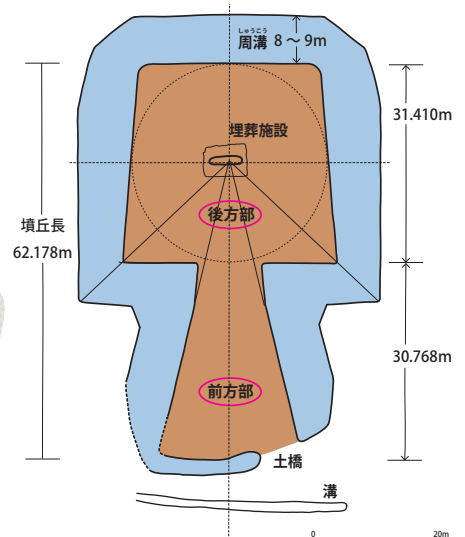
II 高尾山古墳の形が示すもの



高尾山古墳は、方形と方形をつなぎ合わせた「前方後方墳^{ぜんぽうこうほうふん}」と呼ばれる形をしています。この形は、スルガの王が属していた政治勢力を示しているのかもしれませんが。

前方後方墳は古墳時代の比較的古い頃に多く造られましたが、静岡県内では数が非常に少なく、高尾山古墳は東部で2例目（もう1つは富士市の浅間古墳^{せんげんこふん}）、沼津市では唯一の事例となります。

初期の前方後方墳が関西地方を中心に発達し、前方後方墳が東海地方より東の地域に多く分布することから、狗奴国東海地方説を唱える研究者のなかには、前方後方墳を狗奴国の墓制と考える人もいます。



高尾山古墳の俯瞰イメージと平面形復元図

高尾山古墳の規模

全長：約 62.178m (前方部：30.768m、後方部：31.410m)
墳丘高：後方部 5m、前方部 1m ?
周溝幅：8~9m (南端は2m前後)

Ⅲ 高尾山古墳はどのように造られたのか？

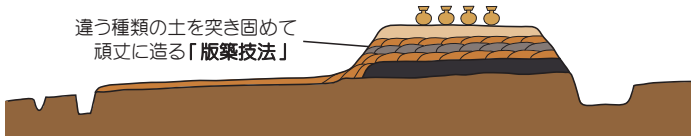


高尾山古墳の後方部の高さは周溝の底から5m以上もあり、初期古墳としてはとても高く造られています。この墳丘はどのようにして造られたのでしょうか？

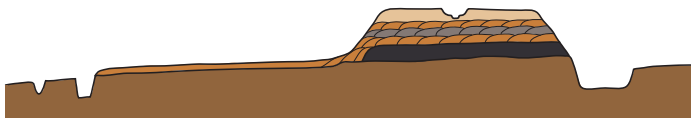
1. 周溝を掘って、その土を後方部に積み上げる



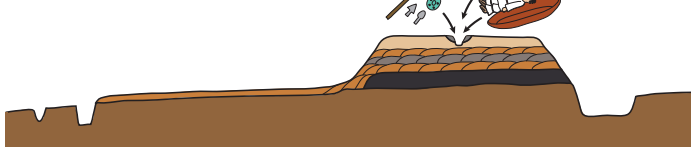
2. 墳丘の完成！土器を供えたマツリを行う（西暦230年頃）



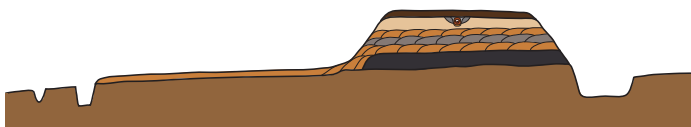
3. 墳丘上から墓坑を掘り込む（西暦250年頃）



4. 埋葬を行う（西暦250年頃）



5. 墓坑を含めた墳丘全体をさらに土で覆い、埋葬行為が完了



墳丘の構築から埋葬までの流れ

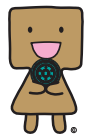
まず墳丘^{ふんきゅう}を構築する前の作業として、古墳の大きさと形が際立つよう幅200m以上ある丘陵頂部を最大2mほど削平^{さくへい}して、平坦面を造り出します。これだけの大規模な削平は、高尾山古墳と同時期の古墳には見られず、より多くの土を削らなくてはなりません。そのため、大勢の作業員と高い経済力が必要とされます。

次に周溝^{しゅうこう}を掘り、その土を後方部に積み上げていきました。その際、少しずつ土を積んでは突き固める^{ほんちくぎぼう}「版築技法」を用いることで、墳丘が崩れるのを防いでいます。後方部の盛土は5m近くに達し、周囲を削平したためにその高さが非常に強調されて見えたに違いありません。

緻密^{ちみつ}な設計規格に基づいた美しい形状に整えられ、地域でいちばん大きく高い築造物となった高尾山古墳に、スルガの王もきっと満足だったことでしょう。そうして自分の力を存分に示したスルガの王は、後にその生涯を閉じます。

墓坑^{ぼこう}は、埋葬を行う際に墳丘上から掘り込まれました。後方部中央付近を長形状に掘り込み、その中央をさらに舟形^{ふながた}に掘り込んで、中に棺を埋葬しています。

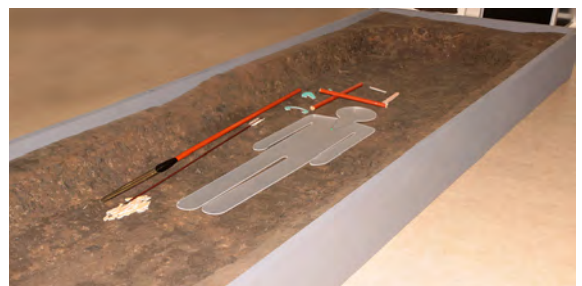
Ⅳ スルガの王が眠るために



スルガの王を埋葬するための木棺は、墳丘上から掘り込まれた長さ5mあまりの墓坑^{もつかんじきそう}の中に直接納められました。こうした埋葬方式を「木棺直葬」と言います。

たてあなしせきしつ
竪穴式石室が主に前方後円墳で用いられているのに対し、多くの前方後方墳では「木棺直葬」方式が採用されています。埋葬方法と古墳の形には強い結び付きがあり、その背景に属していた政治勢力が見えてきます。

木棺の形状：舟形木棺 ※木棺自体は腐朽してほとんど残っていない
墓坑の規模：長軸（東西）約5.053m × 最大幅1.252m



実際に木棺を納めた墓坑と復元された副葬品

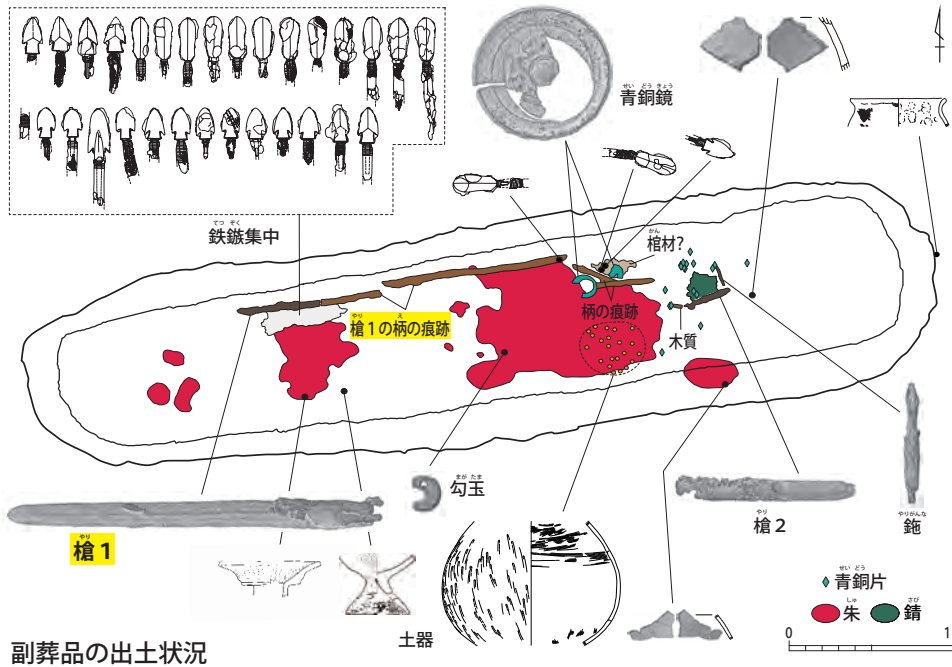


スルガの王に寄り添うように刃渡り 40cm を超える鉄槍が置かれていました。この槍には殺傷力を高める加工が加えられており、実戦の際に手にしたものと考えられています。「槍の王」— 当時の人々は恐れを込めてスルガの王をそう呼んでいたかもしれません。

墓坑内から出土した副葬品は鉄製の武具が大半を占め、装身具は破砕された鏡を除くと勾玉が 1 点あるだけでした。その勾玉は薄緑色の石を加工したもので、長さ 1.25cm とごく小さく、当時すでに出回っていた

マリブルー色のガラス製勾玉に比べると地味な印象を免れません。武具に偏った副葬品の構成は、スルガの王の権力基盤を誇示しているとも考えられます。

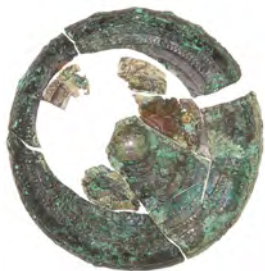
1800 年近くの歳月は王の遺骸を完全に土に返してしまいましたが、木棺の底に敷かれた水銀朱の分布と副葬品の位置から、頭を東に向けて鏡の近くに置き、足を西側に向けて埋葬されていたものと想定されます。



副葬品の出土状況

副葬品の種類

- ・青銅鏡 1 面 (「上方作系浮彫式獸帯鏡」、後漢製)
- ・勾玉 1 点
- ・鉄槍 2 点 ・鉄鏃 32 点 ・鍔 1 点



青銅鏡



勾玉



鉄鏃



鍔



槍 2



槍 1

出土した副葬品

青銅鏡：中国の後漢時代（2 世紀後半頃）に作られたもので、鹿・虎・鳥・羽人（中国の古い神話などに登場する翼を持った人）と思われる文様と文字の一部を読み取ることができます。

勾玉：非常に小さく、長径 1.25cm しかありません。埋葬時は首から下げられていたものと考えられます。

槍：槍 1 は身と柄を合わせた全長が約 1.86m に達します。剣として使用したものが槍に転用されたと考えられ、殺傷力を高めるための浅い溝が付けられていました。柄には赤漆が塗られ、当時は美しい輝きを放っていたことでしょう。

鉄鏃：逆刺の付いたもの（左写真）は西暦 250 年頃に登場する形のもので、埋葬年代の決め手となりました。

鍔：木材の木肌を整えるための木工用具です。



出土した土器のなかには、多くの「**外来系土器**」が含まれていました。東海西部、北陸、近江などの遠隔地から伝えられた土器は、スルガの王が政治的に連携した範囲を物語っているのでしょうか。

高尾山古墳では、墳丘頂部や墳丘盛土、周溝から非常に多くの土器が出土しました。そのなかには、弥生時代から続く伝統を引き継いだ地元の土器に加え、他の地域から持ち込まれたり、他の地域の影響を受けて作られたと考えられる外来系土器が含まれています。

出土した土器の種類

つぼ 壺・鉢・小型壺・小型鉢・甕・高坏・器台



主な外来系土器（右奥の甕：北陸系、その他：東海西部系）

〈土器の特徴〉

- 古墳時代前期に造られた古墳としては、土器の出土量が極めて多い。
- 小型壺・小型鉢・直口壺などの祭祀用に製作された土器が、周溝内から大量に出土している。
- 出土した場所によって土器の作られた時期が異なっている。
- 東海西部・北陸・近江・関東の外来系土器が認められたが、畿内系の土器は1点も出土していない。

〈土器の出土場所と年代からわかること〉

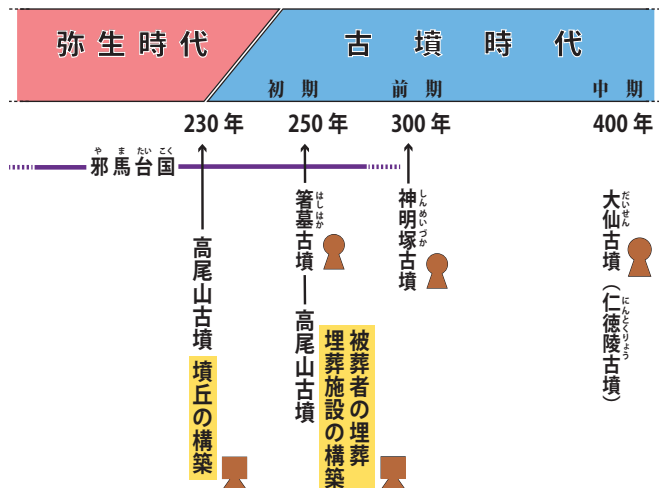
墳丘頂部および盛土から出土した土器（廻間Ⅱ式・大廓Ⅰ式）：西暦 230 年頃 → 墳丘の完成した年代を示す
 墓坑内から出土した土器：西暦 250 年頃 → スルガの王が埋葬された年代を示す
 周溝内から出土した土器：西暦 230 年～ 250 年以降 → 墳丘完成後の儀式や祭祀が継続した年代を示す

V 東国の古墳時代とスルガの始まり — ①高尾山古墳の年代と埋葬者



高尾山古墳はどんな時代に築造されたのでしょうか？そして、スルガの王はどのような人物だったのでしょうか？年代と埋葬者から、古墳の重要性を考えてみます。

高尾山古墳の年代



弥生時代から古墳時代への移行と高尾山古墳の年代

古墳の築造は西暦 230 年頃、埋葬は西暦 250 年頃

墳丘盛土や頂部から出土した土器は西暦 230 年以前のものに限られているのに対して、墓坑に納められていた鉄鏃や土器の年代は西暦 250 年頃を示しています。従って、墳丘の完成から埋葬までの間には 20 年ほどの時間が経過したことになります。

卑弥呼の墓であるという説が有力視されている箸墓古墳（奈良県桜井市）は、西暦 250 年頃に築造されたと考えられ、これをもって古墳時代が本格的に始まるとされています。高尾山古墳は、これよりも前に造られたとても古い時期の古墳なのです。

高尾山古墳の造られた時代



高尾山古墳が造られた弥生時代の終わりから古墳時代の初め頃は、どのような時代だったのでしょうか？

農耕社会の成熟と階級社会の成立

秋になると一度に大量に収穫され、しかも長期に保存することが可能な米は、それ自体に貨幣的な性格があります。弥生時代になって大陸から本格的に水田稲作が導入されると、各地のムラに属していた水田の支配権と収穫された米をめぐる、ムラどうしの争いが起きるようになりました。

こうした争いが繰り返され、さらに水田開発の進展や生産力の向上に伴い、ムラとムラ、人と人との間で支配する側と支配される側の関係が生まれました。この支配—被支配の関係はしだいに固定化される（階級社会の成立）とともに、地域間の政治的統合が進み、各地に小国とそれを治める王が登場してきました。

邪馬台国の卑弥呼と狗奴国

中国の史書『三国志 魏書 東夷伝 倭人条』（魏志倭人伝）によれば、当時の倭国では複数の小国どうしの争い（倭国大乱）が続いていました。そこで、この状況を抑えるために諸国が女王卑弥呼を共立したとされています。

魏志倭人伝には邪馬台国と対立関係にあった狗奴国の存在も記されています。狗奴国を東海地方に比定する研究者のなかには、スルガの王は「狗奴国連合」を構成する有力な王の一人であったと考える人もいます。

スルガの王のイメージ



残念ながらスルガの王の遺骸は残されていませんでしたが、これまでの調査結果からその人物像をイメージしてみます。

〈経済力〉

墓坑から出土した中国製の鏡や、棺の底に敷かれた高価な朱（伊勢～大和産か？）、大量の外来系土器は、スルガの王の経済力の高さと、交易範囲の広さを示しています。立地条件を活かした遠隔地との海上交易や、政治経済的な情報を握っていたことが、彼の権力を形作っていたのかもしれませんが。

〈武人的性格〉

鏡を除いた装身具は小さな勾玉1点のみで、副葬品の大半は長大な槍をはじめとした鉄製の武具で占められていることから、武人的な性格が強い人物ではないかと考えられます。

〈土木技術〉

高尾山古墳は弘法山古墳（長野県松本市）と並び、東国で最初に造られた本格的な古墳でした。古墳築造の前に大きく尾根を削って平坦にしたうえで、緻密な設計規格に基づいて高い墳丘を造りあげました。ここに導入された測量や土木に関する技術は、古墳の眼下に広がる水田の開発で培われたものと思われます。

V 東国の古墳時代とスルガの始まり — ②高尾山古墳の歴史的評価

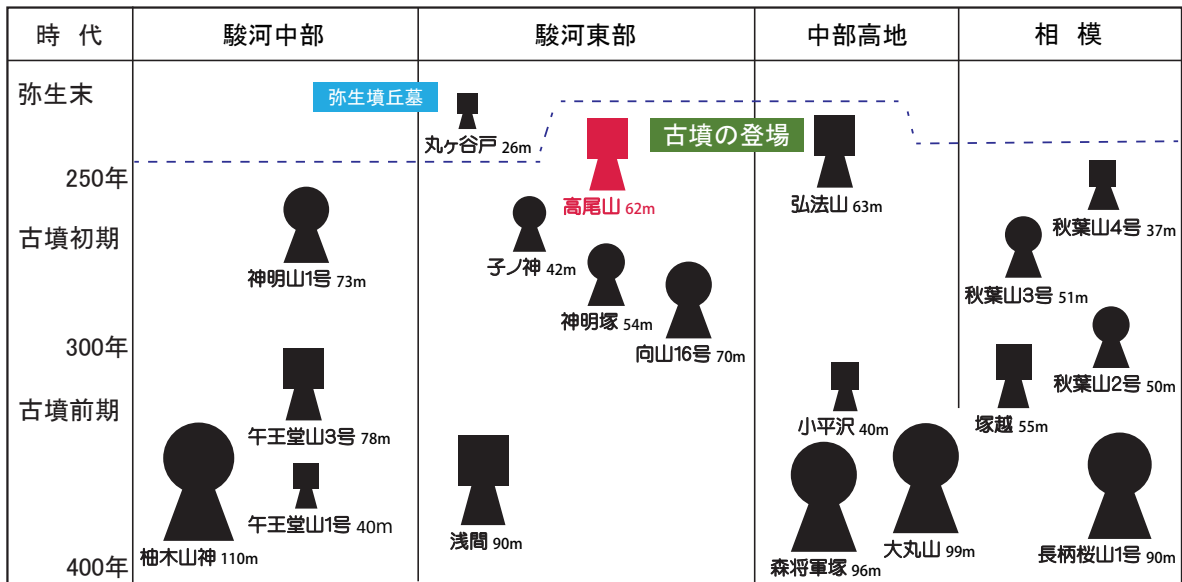


高尾山古墳は、1700年以上に渡り地元の人々によって護り伝えられてきた貴重な文化財です。しかしそれだけでなく、日本の古墳時代をめぐる議論にも大きな影響を与える歴史的な遺産でもあります。ここではその歴史的価値についてまとめてみました。

ここがすごい！

1 東日本でも独自に古墳時代へ移行しつつあったことを示す歴史的遺産

これまで、地方における本格的な古墳時代への移行は、卑弥呼の墓ではないかとされる箸墓古墳の築造（西暦250年）後に始まると考えられてきました。当時の日本の中心であった近畿地方が古墳時代に移行すると、その影響を受けて地方でも古墳が造られるようになる、という伝播論に基づく仮説です。しかし、高尾山古墳が箸墓古墳より前に築造されたことが示されて、東日本でも独自に古墳時代へ移行しつつあった可能性が浮上してきました。



駿河・中部高地・相模地方における初期から前期古墳の年代

駿河・中部高地・相模地方における古墳時代初期から前期の古墳を年代順に示した。図内に示した古墳の大きさは、実際の墳丘長を相対的に反映させている。この地方の弥生時代末期となる西暦230年頃、小規模な墳丘墓は飛躍的にその規模を大型化させ本格的な古墳が成立する。丸ヶ谷戸→高尾山への変化は、この地域における古墳の成立過程をよく示している。

ここがすごい！

2 古墳時代初期の東日本における、最古級かつ最大級の古墳

高尾山古墳の西暦230年という築造年代は、古墳時代初期の東日本において最古級であり、墳丘長62mという大きさは最大級です。現在のところ、同時期の東日本において高尾山古墳以外に全長60mを超えるような古墳は、弘法山古墳（国指定史跡）しか発見されていません。

ここがすごい！

3 スルガの政治的統合を示す最初のモニュメント

現在、「駿河」というと、多くの人は静岡市周辺をイメージしますが、かつては沼津市周辺に中心地があり、その状態は駿河国から伊豆国が分国された頃（西暦680年）まで続きました。高尾山古墳は、後に駿河国を形成することになるこの地域において、西暦230年頃すでに政治的な統合が進んでいたことを示す重要なモニュメントです。

ここがすごい！

4 畿内勢力と対立する勢力の存在を示す？！

高尾山古墳から出土した土器のなかには多くの外来系土器が含まれていましたが、近畿地方の土器は全く出土しませんでした。これは、スルガの王が畿内勢力（邪馬台国）と対立する勢力（狗奴国）に与していることを示すのではないかという説を唱える人もいます。

沼津にはこんなにすごい古墳が
眠っていたんだね！！
高尾山古墳の大切さをしっかり学び、
沼津だけでなく日本の貴重な遺産として、
この先もずっと大切に守っていきたいね。

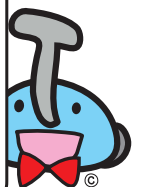


スルガ最初の王ここに眠る
高尾山古墳

発行 平成28年7月29日

編集 沼津市文化財センター

TEL 055-952-0844





青銅鏡（3次元レーザースキャナーによる画像）